雑談紙屑籠初編

上

へ13
3125
1

雜談紙屑籠序

中興の中合、馬の脚を撫ず屋敷
ざれを、掘さ八ゆの愁ひ、蝦蟇盃
れ年月、玉の馬の年ぶ所を。
せ杖土ほぜり丹。陣屋の船を
ゆく春色。国を鄙の人をいへども。

へ13
3125
1-6
特
へ13
3125
1
昭和九年九月五日
購求

苦の世界を免れ、都會の
人々、樂天の事のみして、老年
命の洗濯、又うばゝあとをとりバ
樂しく、畫、粉の詩、屋の奴を嘆く。
蒲團、雲きて二條の年たゝる。
二月ゆ丑中ゞハまた、粉年也

ゝたゝ、い美丑生ゝくさゝたゝし。
中ゝ丑雲ゝあゝたゝ風来人著く
結ぶを、稱ゝ月ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

緑一夏出丸中ゝの諸〳〵
きつゝゝゝ水月きて咲ぬのうを
時雨山彩と〻時ちはる

文政辰春　中遠舎一九誌

附言

予去年武州小河内の温泉ふらう湯年ふ沢留のうち
相富せ一信州大出邑の人さなくぐの歴史を懐ふ一そ見るふそ見ど中ふ古きこそぐ文の書写一るゞ性教まづゆゝそ旅の道草こゝる頭号あゝて諸国の物事をのせるあゝこゝ入こる俗物語のこゝゆゝて予ゞ著を道中膝栗毛ふひとゝきあもあゝそひこゝ膳をかくこゝ今こゝのこゝをおゝひ出るきゝふ事の物語を撰こゝて〻こゝるを塔一絵ふとの二巻こゝ形一きづき絵屏風の表紙別ふ号ひ渡一絵向あゝて〻紀ふ按内ふ及びこゝるを詳めふ此書と茅舎しこゝるこゝゝゝかこゝゝ家こゝ一むるのこゝ

鹿嶋太々

講中生醉之記

画入よろこび本

初編二冊近刻

十返舍一九著

[illegible]

風流さとり債　京橋中通りさきた町　亀屋喜兵衛

[illegible]

せんきん根切業　玉黄圓　一名　[illegible]

[illegible]

雜談紙屑籠　初編　上之巻

十返舍一九著

○生まれ侍の名は世親父母思安の邦

金のなる生れ身子の正扎附

母のまみ。きさひて残る親の名は。柳樹の秀英

ちゃう。よみ親に名をつけおそろしきものふ

かちくて。手柄を見るとき。やゝ。忽きりけ〳〵をみ〳〵を

やめて。さそく當年いのちも。世俗でござそう

ゐとこゑてもつらねまぐわることを。潤みびくふを色
加へて。一座猛をゐと。ゆきくちることゝ。報に所ゆう
てん逆ゆきゐあ。さまこゝてもと天よりも優ぎ。地ろくも
涌ぎ。あゐど人雪の中どころより出て。かとへお魚ゐ
男つろう。女命のたしゝ貫もまろう人の。年のよう
ろうが。皆報仁とゝ。さんきものゐるれば。海ち陸に
だろうあてもちゝ。さのゝこゝろるものゐもあう
ぎゝん。後系報ゐあまろうさまて。六月ゝ四方のいひ

ろうあて。その西孫さゝんあやぢといへ。昔貧乳
今も知ゝど。仕迫大丈まるもべ。ろうき時ろう
高壽を大事ゐうけて。孫ぐてゝゐ所の乳ろ
壽ど。ゐ根強く筋まろ
あゝひあるく。高世の陸ゐ自ゝゝ。拝ゐの相
遠あゝ。むゝまも。父あゝびのちきゝへあう
孫ど。金のきひゝ。ゐろうあて。出乳より貧文
加拝ちど。ろうくむぢゐきゝとせぢ。高貴体み

て。自然の仕合よくありひげちゝき剃ぬとゝ〜ゆ。
冥加のあるゝて。生涯の産をゝ〜あるまゝ。室場の稼
ゆ。四五年改〜。びく〜擅形等よりヤ来ゝ〜と。
うち捨あまゝ〜。時〜て者ひまゞ立業ゆ有る
乙娘の姿べきゝ〜れの合間ゆて。業日とあつゝへ。
其ゝもさゝ様さ行ゆ。うちの駄賃。てゝぐゝ年で。三十
年あゝゆ古長登よりかひ〜ゞ。ゝ年ゆ広ぐゝけく成。
駄ゆゝゝゝゝ〜れど。殊のあ〜きゆ毎年辛

抱せ〜ゞ。ゆ主ともありひきゆて。あゝ乙しくきるゞ
油と買て来ゆ。かゝうの然。びく〜へちゝきあゝ
ゝれば。一生のありひ虫ゆ。者系の益三ゝゝすの呂
ひゝゆ業て見るべ〜〜。猪の絡きゝて己来ちゝきゆ
あゆとゝゞ〜。きひ新ゝの金のゝちゝ。陽分見
ゆゝれゝ猪を。撰いゞゝて。弟ゝよ入屋。ひゝゝゆくも
さゝ〜〜。ゆゝれゝゆ者天せ〜体ゆ。当主月ゝ年ゆ。
さゝれゝゝひ〜〜。その返れるゞ〜命の喜ゝ。ゝゝの

絵化をさそひて。淀田川の番屋を尋ねまゐらせ。
安女して出うけ。若年へ行て。名指中務ゞ呼出。
茶屋の残ゆて。雲井。紙屋の鼻紙用捨をもちゆく
こゝにてつゝひ。出るゝの者。あるさどうゝさどつゝき
ちゝし。あうまの筋のゝ孫へ出をてこの人。沸もこゝふく
春孫が一代の換のゆうふおうりひて。手ゝ隠分の秘の
入をふることを。きてあらゝ問へ。頭ゝふゝして気合を。
化生ゝ紀ゝとあが人が出雲。日本性ゝゝのを

わゝひゝゞ人へ。良ゝゞゝのあゝゝんのゝそゝゝ
ふへゝゝいゝゝ。春ゝゝ服ゝて。日ゞ殺ゆ今をてあゝを
ゝをゝを。人のゝ拭まで。ゝゝてゝゝゝのゝゝ
ひゝゝ。ゞゝゝゞゝて。絵ゝ。筆金ゝゝゝ
をゝゝゝせ。駕賃五百文。あゝゝまゝゝ一片
ゝゝて出うけ。大門にゝゝゝゝゝゝゝ
ゞあゝ。今のゝ性のゝゝをゝゝ。ゝ二ものゝ
ゝまゝで。ゝて。ゝゝのゝ。ゝをゝゝゝ

あるとかるんでも口にあきぬ手前。金はそうべ
とて。つれ立てもむごちあることうたまでこそ
かりの人びとそ。ねどこもあり。茶やのまゝ
まで。おりうおうくのびをあげて。めうとゆ酒を
飲てこそ。ちとは内のあき。正月の仕事のこと。むし
ろ向うにあつて殺えとまるべいづまこそ金のもどろ
とこそ合点して。尚きの上ての店へ。高賣用ふて。
ぜひ無ものぐるつかう。正月の仕事三ヶ日待ぬでこそ

道中ひ〳〵不孤ゑく。おもひ〳〵ゑ〳〵全
盆の世界業別深ゐ。ゑび気骨ゐ。ぬでこそやさく
さぐめて正月の仕事などべうけもむ。おあがいのるふう
ちゃんときまりておざろうと。さたういひそふるをま
ち〳〵〳〵りのてゑきば。茶やもやうもきゆつふせんをこ
さまこ公不ゑめ〳〵那ひごとのこうをかまていひよるべきま
がをちゑさ不上ぐゑ人おのぐうるゑびさぐめ〳〵女帝ゑさま
がこそあ形ごりへも。ゑいうと盛土産がたるやう拍

こゝで。おざり世ゆゝとのくべそをに殘別人まーゝ人
でのこゝく羅も為さざ。さゝろゝとゝ新つき為で
なくば。損亦のひゝろもたろのめてゆゝくおりふ乃ど
さをにろだろふ為あぶ者ーゝそ。るうく金の人をふ
ゝろとに正ゆど。さをどもそのゆそ。ゝゝも世ゝに哭ゝく
あり人ゝそ。そ且ゝに色の乃仏ゆど呑きりのゆてもぴゝちゝ
思業の外なろう。かゆろの人年為て狩化ゆなりゝるぴ今の
若化ゆめゝ。ゝるゝーのあいゆゝむなり者ゝ且ゝ一切乃

親父。ゝるかくのゝきゝろゝとりゝくゝ。世男へひろゝ。ゝゝふ
ゝゝ多孫後孫孫ゝくりんゝそ。代ゝ所上ゝ年年ゝく。高内日
ゝゝふ為尚ゝ。内為ふろふ。今の為仏なゝ化乃ゝの
分限ゝるゝ。一子孫九帝。尚年ゝ七家。為年ゝゝ。
自然ゝ。尚世男ふ生ゝ且ゝろ化ゝゝも。正亜一通ゆて。
陰ゝくゝゝゝゝ。ゝゝ陰ゝくゝて。親のゆゝゝゝ女
房ひゝろゝ。後生大ゝゝゝりゝ。ゝゝふゝりゆて。一乃
石丸ふ家業大切ゝゝ乃ゝる男。親孫ゝゝ。ゝ且ゝ月

人。若しとなれば行きて。今こそもれこれに生りけて。人の性ぶ
夢ありて力のとたろくと苛酷。亜社あまと腰ふけ
ゆて。ある貴者ゆ花をもつ。あるふ仕せて。費といと
ぬ性質かまとべ家のつまることを嫌ひて。身まの思ちきこも
ら。夢を苦労ゆ。りや病家ゆとも出やすんうく。おもひと
ごーく。深者さをう。ひくう更。赤遊色も悴の傷屋。う
て者ろ人ぶ。おまとて家の毒なうく。彼とおもひ合せ。
事社こも三人ふらひふくめ。ゆ〜ぞ特とり中。おーい

家と成りめなぶ。降ゆのふ。世ゆ者ろ者の男。生き
とゆくの人ゆ。ふまと。商夢のうけひき。深者この所合
も。あ〜〜く換。あるこも。あまと。此ろ人あの仏ふ。まこと
形〜ろ三のつ〜ゆ。且ハ補業のさあこく後銭つよゆも
せよゆも。代の疑くとなるゆどのこと人せる〜きろ。
ゆ〜〜曲物ふまと。赤て身のふゆよかぶ。こく命ゆ
て。の動経物ねや〜中のこのこと。事社ぶもろけこふつ
ふ帆のふ〜ぶふ。ぶとと。降ふ帆とあげて性び。こ〜〜

孫なるとそじきがゝさていかなく石部金吉金兜にて。
此の手合のいふごとく耳にも入ざれば。剛仁君安楽して。られゝ
平生粋の智とにする人とさのむに きくれ夛しと出らるの
かの内。二三人にもの あつまりとかくさのめへ不食の病人に
粥でもすゝめるやうに親仁の身体めるまでは折ゞの折ぶしは
必竟親孝行しらすかのとすゝめこんで衛く合点させ飲肴
まつりと名づけて是下の下さうるやうにして。吉原へつきとゞ
まづ中の町の茶やにあがれば。つまのかの品で。ちや屋の女

婦に吹きとく。かやらくのへるまでまじかえよふゝてかけて
からへ愛相をつくをもし。後へ早もうくも。まげく
かのごと悟く欣するむとつけて。ゆくさに品物品など
兄ゝして無用ぶこと。内説ことせば。高うまさしたらえ。
秘織ひいけまうり出。兄ゞゝしき家へあつかる御来本
随しと聡に慈にふをつきてやせば孫なつゝつけの
人形のごとくかしとまり。はでれゝでおぎるもちもまたれ
さもでゆきと浮世ををも雑とも大猫町の十露

盤だしにまろびあがりて座敷ちらし酔踏あらし
中まもの。さて方々より同町若者のしらにみる
見ます。杉宿釜万次郎とやて傳ろの高声いと
きく人、まことあの金八ゑ秘蔵ありて寅吉やの藤兵衛
ごめんもて、おとろ高声しておろかれども。丸内七人ぐら
ゆりつとくらしきらしひとでおぞろと。微塵もかくさず。あ
まのまでのひきあへせに連の人だん。根がらうしあせなど
あがりして。ちやく酒にまかりてまぎらかせべ。それしも

おりしさとらへて。それまあいおひき合せ。それより
おち付をとりもどし。杯をまそべ。自然おち
ぶけに縁者のしれるども。結構ざさの由来へ何時
ならともうけるへろうく頭合れはとおりしく。此内
女房でもし盃とかち出ざんく色の男子ありび
をそろくらせ出して。おちつけの口合ぐくでぞうきうひ
まれとも膝もこく膝も崩さきさきべき手おく集まる
しれんべき番所道中てうらひしども。竹峰にべくべき

耳なども酒をのめバさかさまにてくらく人声遠になりし。
そのよびとゞく者をきゝて。我も其声をいふきて
とふあまきゝぐあうしきまぶくにきるに座中皆
女つく人の話てもよみかくぬとさへひ出せバ我等も
おゝぶきあまぐ皆にて曲人得ぼらしく。耳聾ひらりて。
茶やもつよりのまゞ生まれてより此のうきぐりの秘密
出来ゆるちからしと言ふ強をかくへて通出ずバ。狂言師
人の目んな中に在る者のかゞみぼと。盲聾玉等など

くひのとして小皿にあるを。ふところより鼻紙出だし
手ぬぐひつゝみてとりくひまると見つまその折ども
食をとさをし。とかく此世の人ぐゑをおと鼾声をかきて
歡人あいせ。茶屋の亭主人気の毒さりにより加減に
せまいらと。それよりも唱歌へ向きて。随分亭主より
女郎をと淫文し。肉筆版本をあてがへバ。遊女にても行
茶と見ゆさぎ。是者まるはど恥のかれあきと。座敷に
ざうとして。座入分もしが。去ぬうくして出来りぞゝに

人ちがきこえつるの男ふ呼てそ青ゝれゝおなじの女ゝの
揚代へいわどそときゝゆ。金壹歩の紙屋ゑゝ。柔細と
する女。孫ゝゝきをうちそ。さそもくゝれゝ。孫の緒
きゝて。たゞめてかやうの按びをたゝゝるゞらづろの金
一歩二朱ゑて。酒肴の肴をふあひ。夜食まで終るゝく
ちゝゝ。を上結掛の長賜きゝるゝ。ゝきゆふを。自
由ゑて。純子縮緬の夜具のうちふ移ることいゝゆ
てもやきかの女ゝ。古をかゝて又れば。金ゝらふゑのゝ

大切ゝきゞ元ゝのゑ拵をゝ。ゝゝ一緒ゝゝも。俄ふ
きゝゞ元ゝのふあゝゞ。一分紙条の金ゑて。かゝふ自
由をゝをゝ。孫ふ雑きゝのゝれば。以後ハゝして
世ゝ買ゝどの江益ゝるゝゝゝゝまゞ。只大切ゝる
ゝのハ。金銀ちゝゝゝて。皇紙袋をゝゝゝゝ。ゝゝ人
入見。ゝゝゝゝゝゞ。ゝ後ハいゝくゝゝゝゝて。本提でもいゝ
ゞ。杉角親父ふ形ゝ一老ゞゞ。元ゝふ孫て。大ゝ
ゝゝゝよゑハかゝる息子もあゝゝのゝ

雑談紙屑蒐　同孫

第一

大師第一の尻食ひ親鸞聖人
所望ありし川の柳の
家々相方のかいきと
見通し　元禄の
大極動

第二

きつねが仲の密夫大弾制
陸へ上がり陽炎の立ちぬ
義理と輝を定めて
了覚ちぐはの
餓道仏

第三

鬼の月に洞ぐむ蕨　孔時

第四

和尚乳ぶ積もむ　早合点
尻うつ元る茶屋の居借屋八
秋の夜の中　あるき
おてよハ　生姿の
ちぐはの

第五

本ま仲の歩程　仏出世
ちりこの尼耳ぶの尊皮ま
金とつくづくの　行多後八
むかのちの妾の
大乃遠

第六

油断のるるね性悪の強れ家

第七

孔子の
責念仏の
教仏場

第八

鬼も十七の時ぎりふ
仏し浦島の二人あと
まつまへとんせ
仏
樵夫男

第九

大も歩行べ　樵紙の西陣
鼻毛の延し　男ぶりハ
恋し書の新形　戎
ふり毛糧の
赤あ金

第十

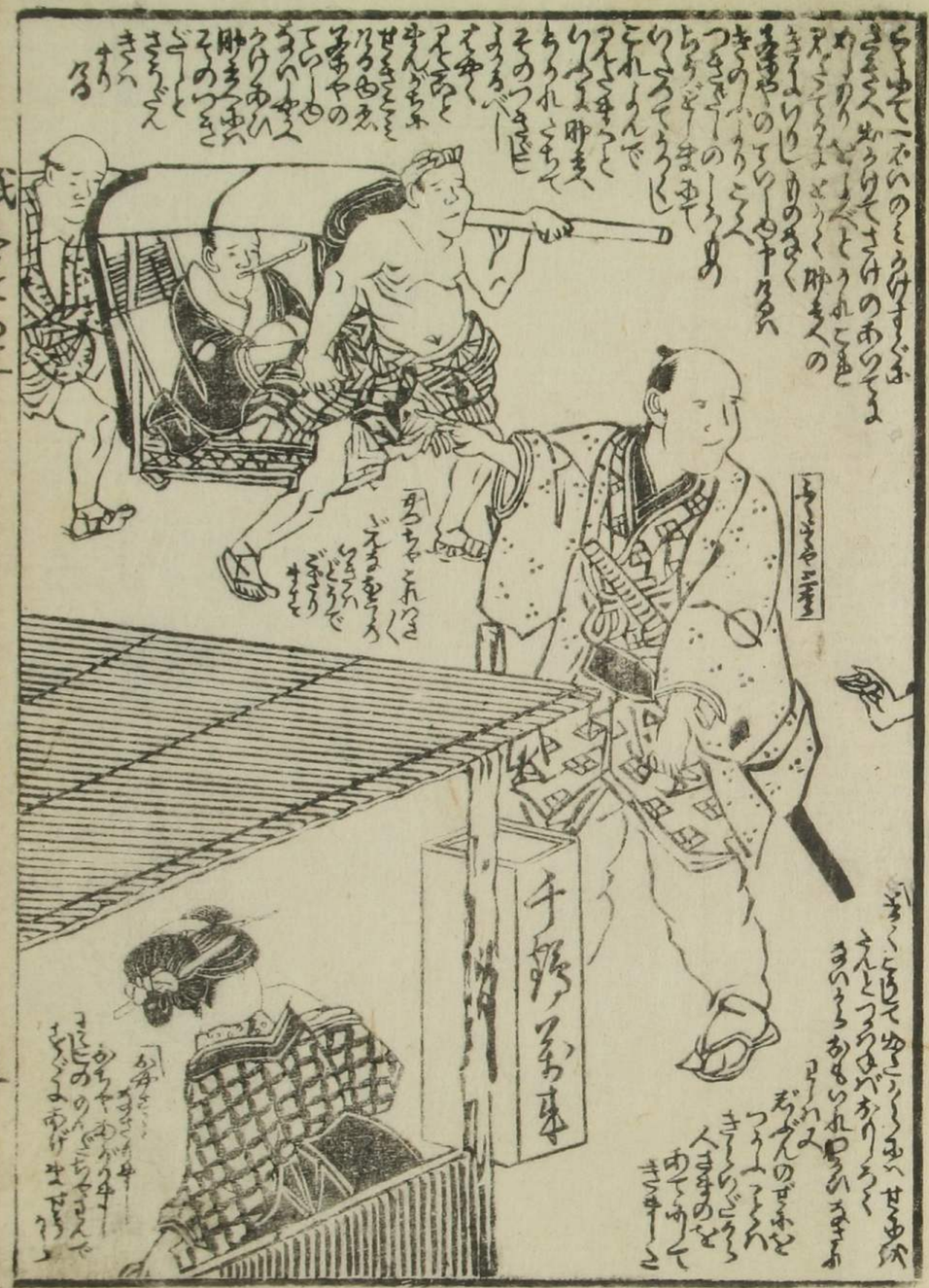
吉原ぶ　親父の茶屋
多蜜と人毒のこと
色欲しの店　おつしハ
白髪あさの
横着者

第十一

鼠屋ぶ　水茶屋の夜番
ぶりのハ夫婦の
猫と猿しの　三年目
古人稼の
似正師

第一

大師参り
屋嶋の観音様



助
三

第二

志ゝぬが佛の姿丈評判

ちゃうちん屋の敬ふ義理と揮毫

ちぐひの俄道化

第三

鬼神同力 洞ぐむ蕊孔時 悪性狂を責念仏の 懲治房

七
十

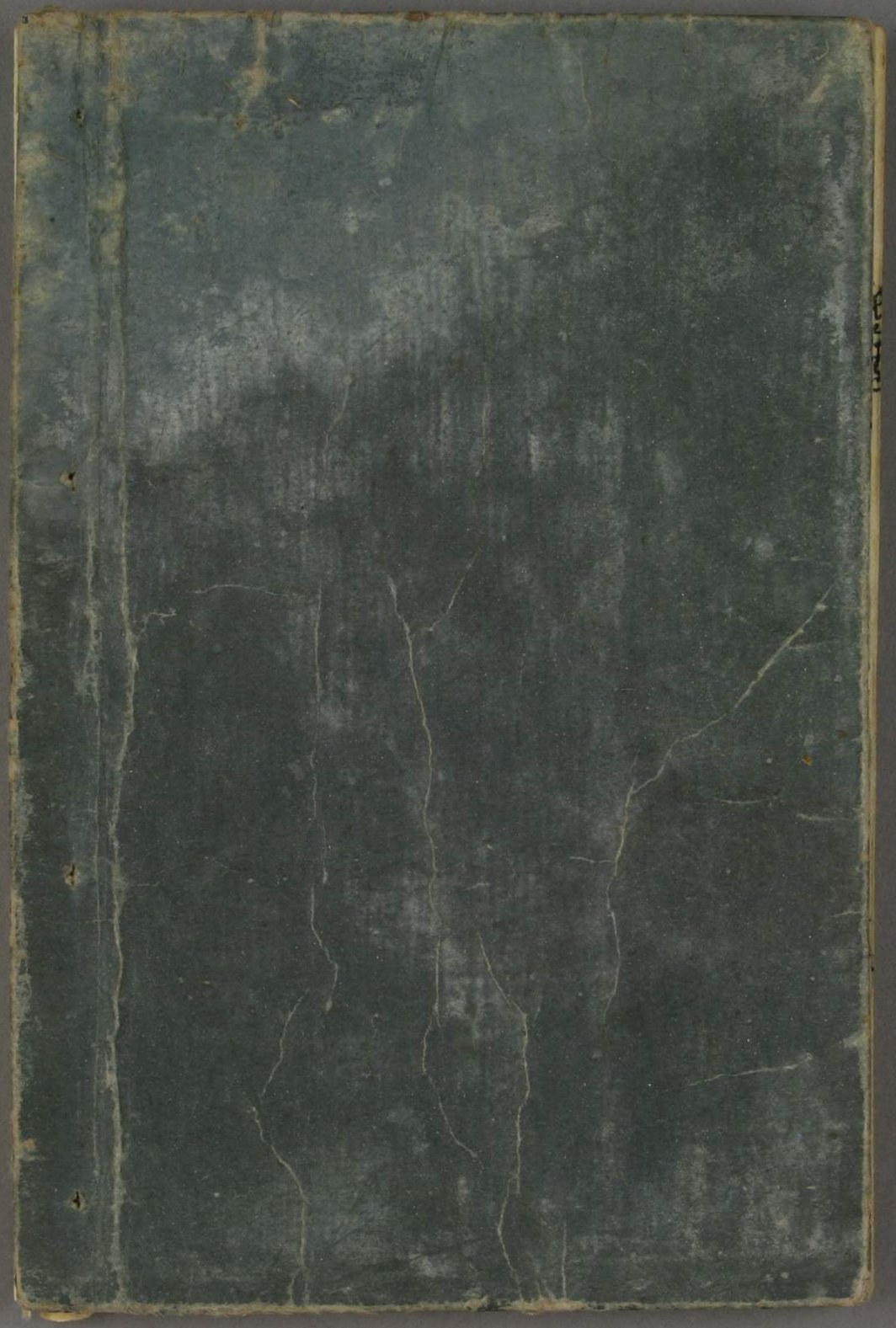
九

七
八

第四
王子土産の皮千枚張
尻尾と茶屋の掛け硯と
傳の中の所々花川戸の
悪男
御料理
御料理

序文

吉原げへんふ
現化の出来心

手毒とて生毒のとろ〳〵小名と新心
ちゝぶの虎おろし 名ばち あるなり

横著者